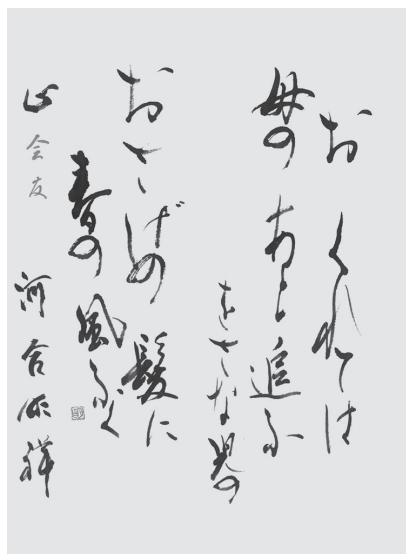


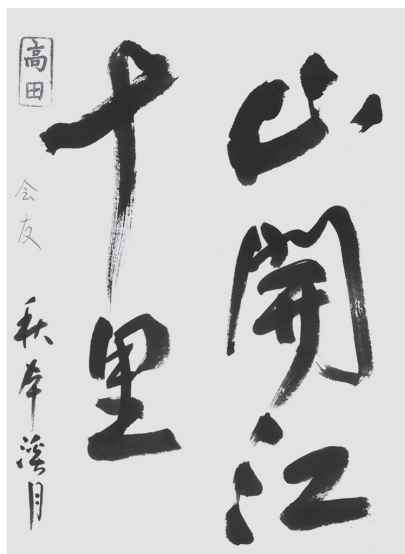
今月の最優秀作品

【新和様半紙】



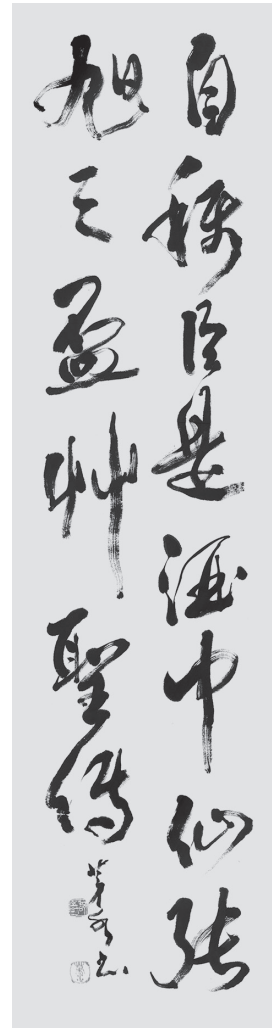
山 河合 明祥 鍛えられた運筆でのびのびと表現。やさしい墨色と歌意がマッチし瀟洒。後半の二行が作品を引き締めた。
(審査評 吉家 桂雪)

【漢字半紙】



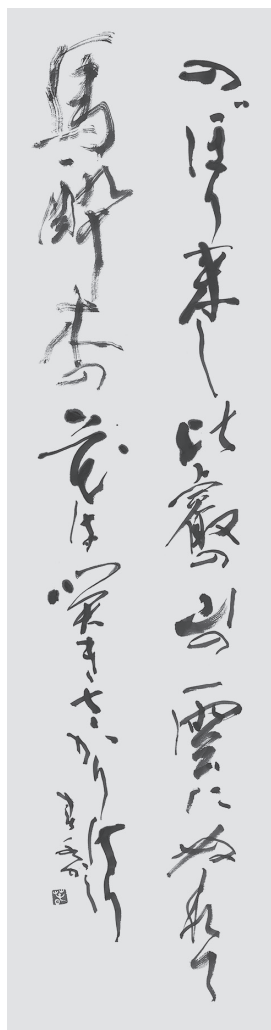
高田 秋本 溪月 章法、用筆に優れ完成度の高い作品。含蓄ある線の中で「十」の縦画の渴筆が作品全体に明るさと爽快感を醸し出している。
(審査評 松岡 雪華)

【漢字条幅】



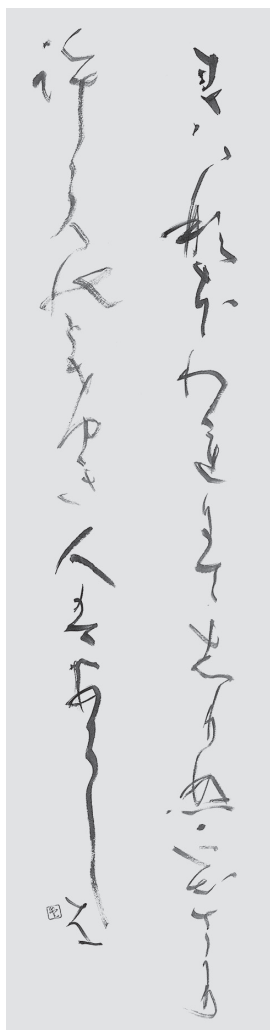
松 角田 茅水 文字の書体や大小・線の太細の変化に無理が無い。濃墨を駆使した鍛練の作品は、快く鑑賞できる。
(審査評 永井 香樹)

【新和様条幅】



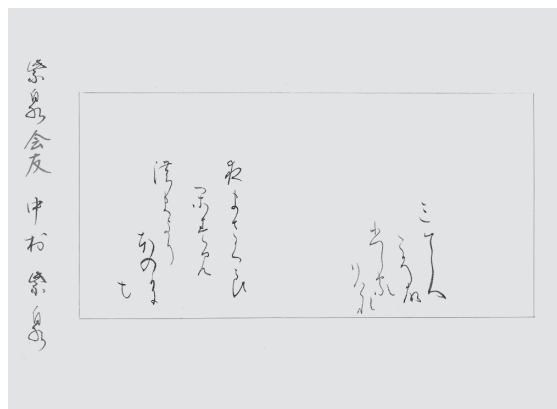
伊賀 石田 春代 鋒先の開閉による線の太細と自由な運筆が力強く魅力あり。「馬酔木」の渴筆の運筆がみごとである。落款の位置留意。
(審査評 二宮 桂秀)

【かな条幅】



祥瑞 河野 愛子 軽やかな筆の運びで多面的な様相を表す技量がある。柔らかな墨色と優しく揺れる行を用いて、温雅な景色を仕上げた。
(審査評 川島 史子)

【かな半紙】

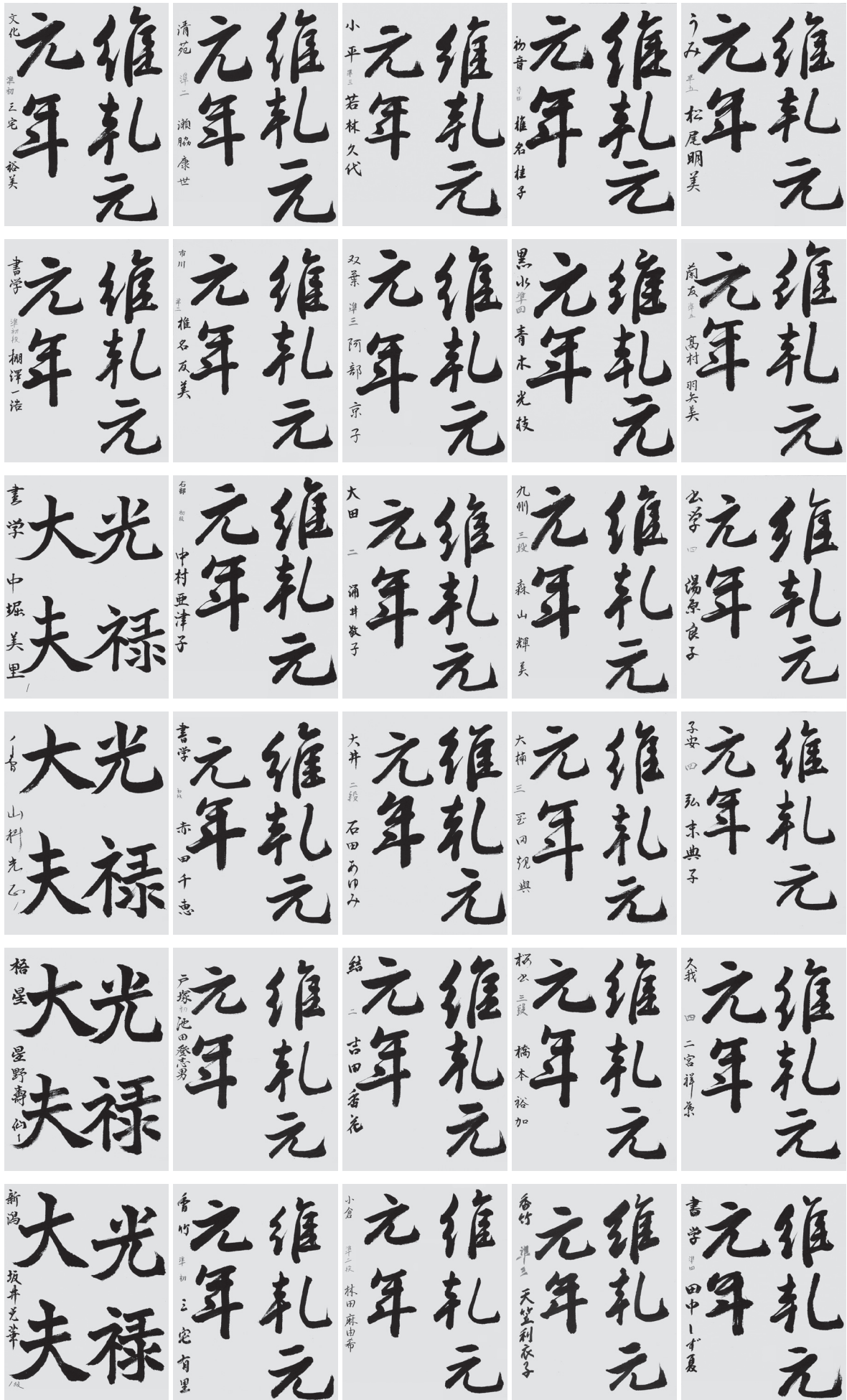


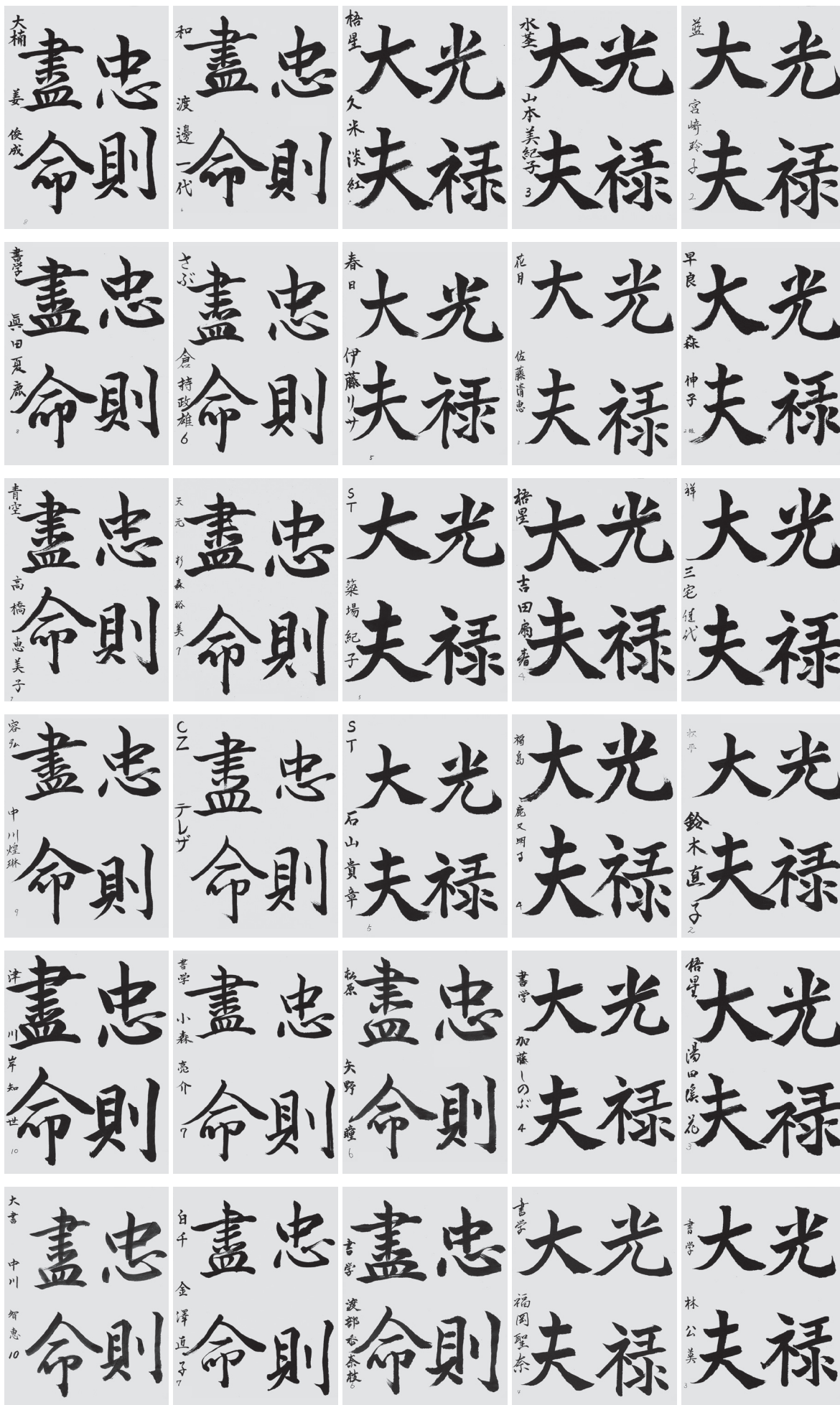
紫泉 中村 紫泉 行頭の高低の変化や空間を的確に捉えている。下の句「てし人」の直線的な深い線から細線まで秀麗にまとめている。
(審査評 永瀬 和子)

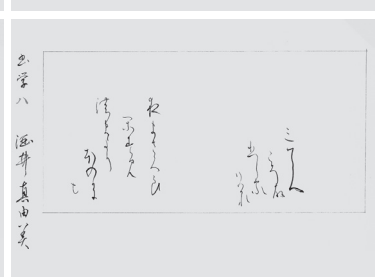
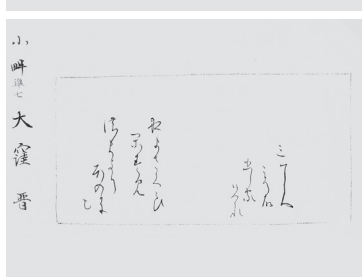
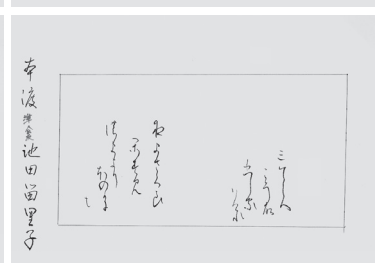
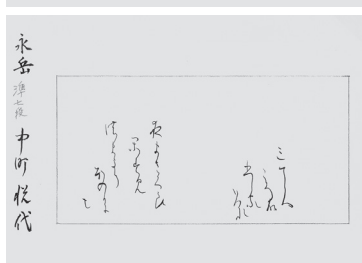
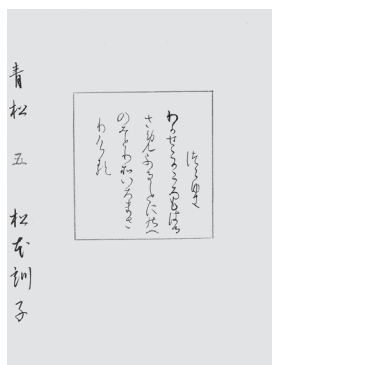
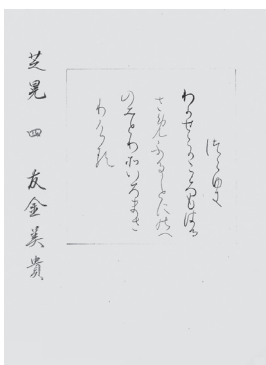
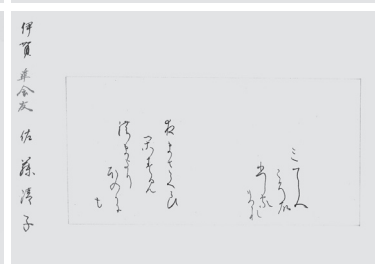
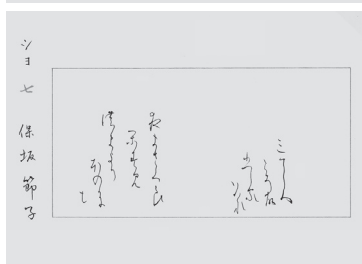
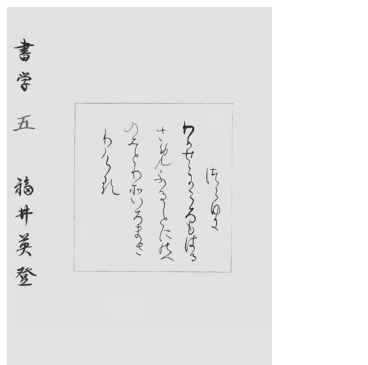
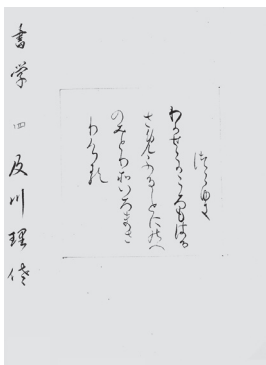
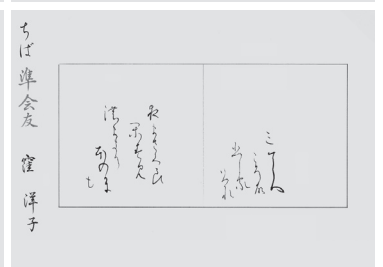
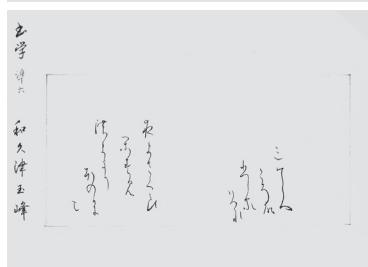
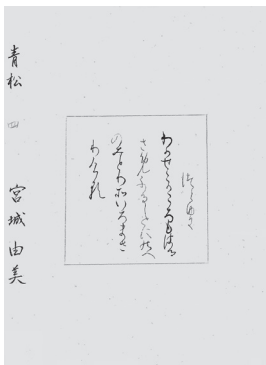
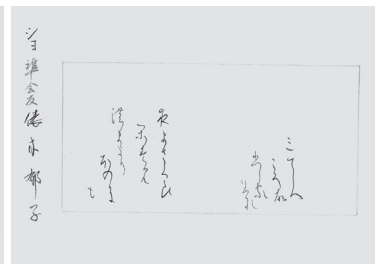
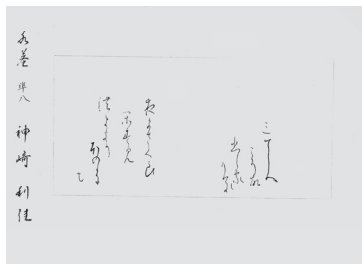
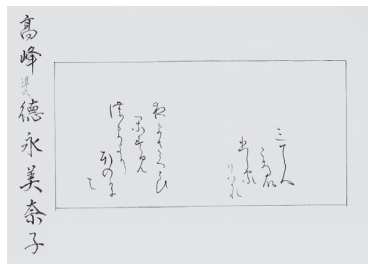
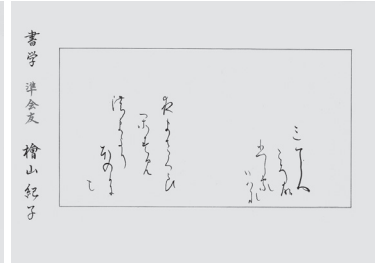
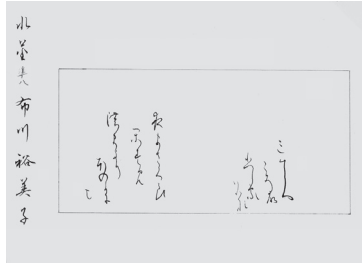
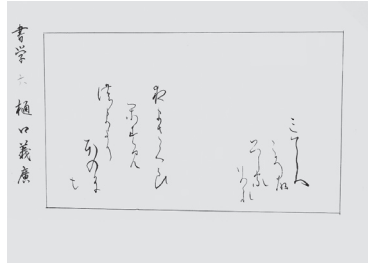
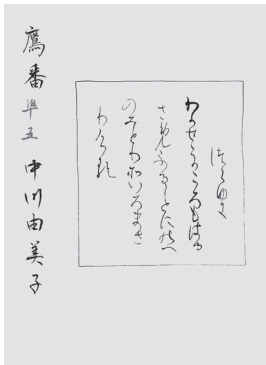
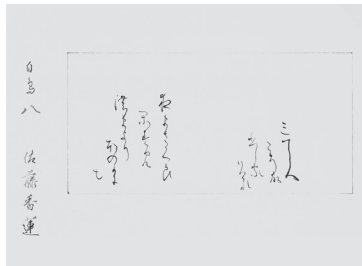
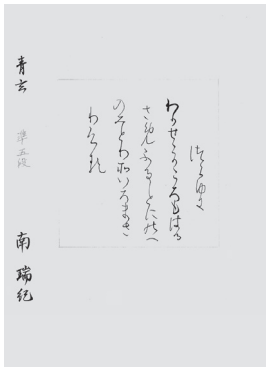
5月提出の競書の写真版全作品は、5月29日(木)より本会ホームページに掲載いたします。

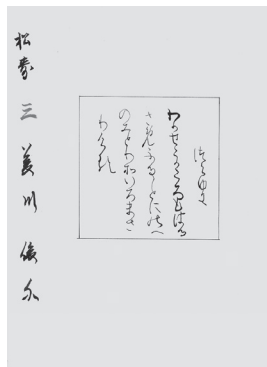
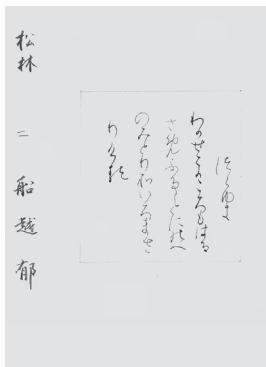
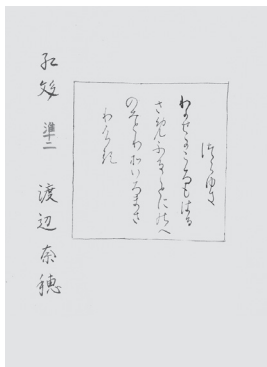
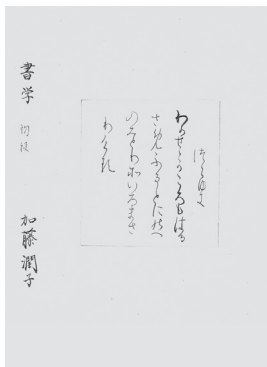
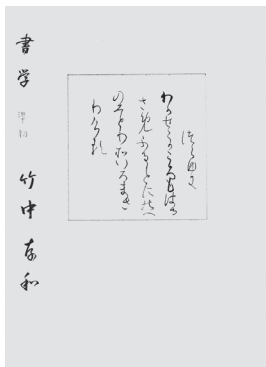
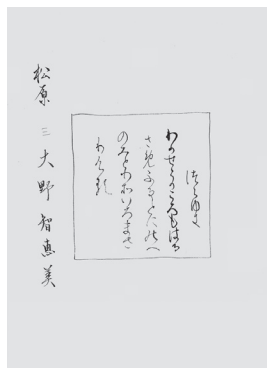
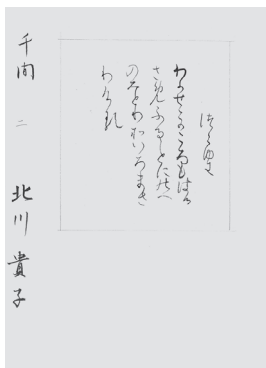
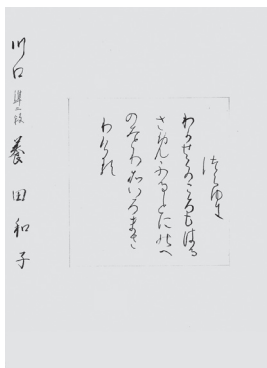
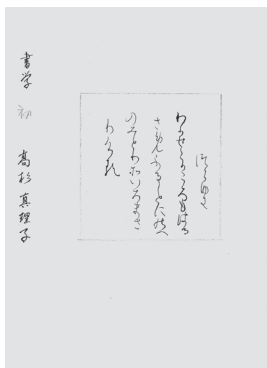
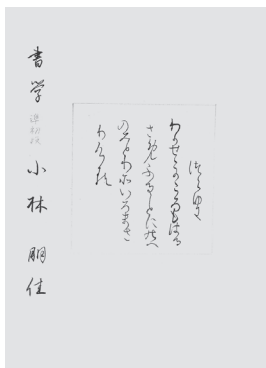
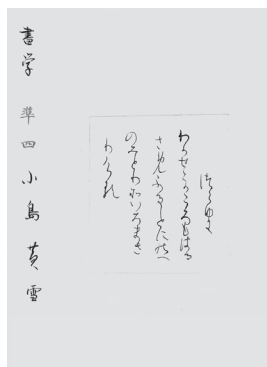
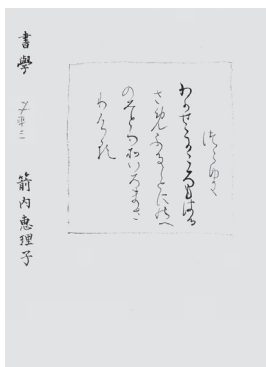
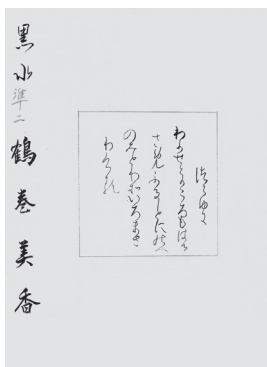
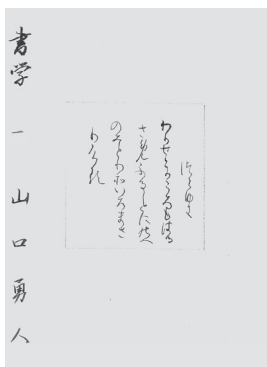
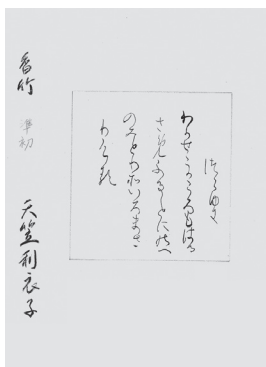
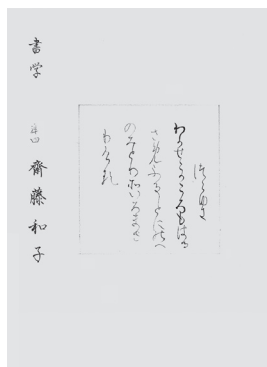
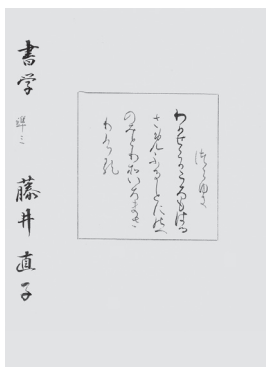
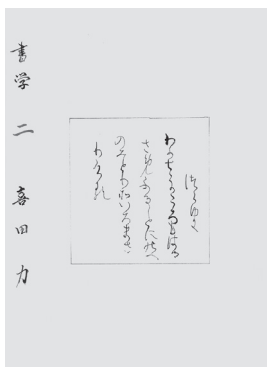
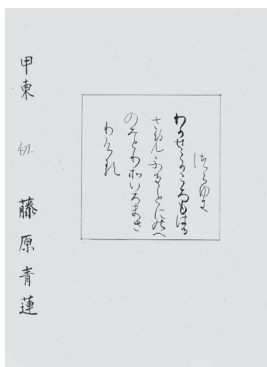
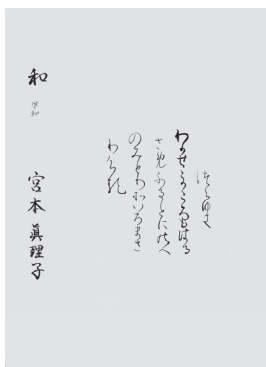
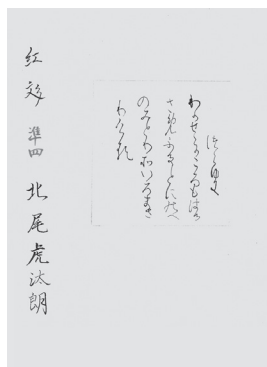
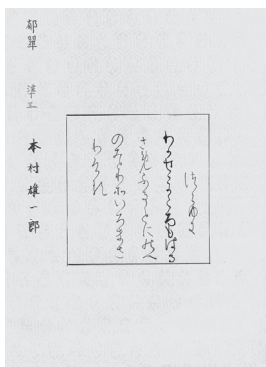
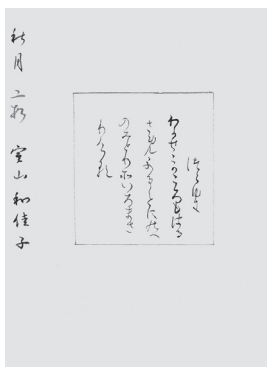
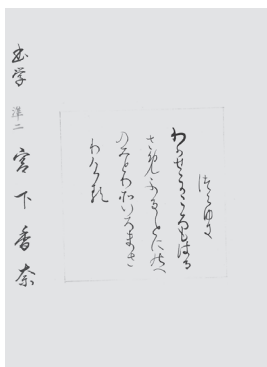
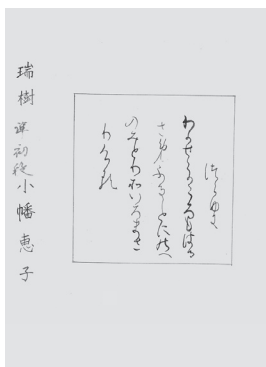
今月の優秀作品











和月 山本あや子 7 いろはにほへ とちりねろを	永岳 岩田智恵子 6 いろはにほへ とちりねろを	書学 安藤雅子 4 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	信長 野中智子 2 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	和月 山本啓子 1 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき
大楠 姜俊成 8 いろはにほへ とちりねろを	六花 三村莉杏 6 いろはにほへ とちりねろを	書学 野澤貴代子 4 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 中塩美里 3 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 赤田千恵 1 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき
信長 岡田敦 8 いろはにほへ とちりねろを	須恵 濱田貴枝 6 いろはにほへ とちりねろを	鳳 加藤貴美枝 5 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 佐々井美香 3 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	益 小林香代子 1 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき
芝見 喜多木綿子 9級 いろはにほへ とちりねろを	天元 杉森裕美 7 いろはにほへ とちりねろを	六花 藤永杏子 5 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 渡邊音和 1 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 浅野由真子 2 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき
書学 大川敦士 10 いろはにほへ とちりねろを	清 島田美和子 7 いろはにほへ とちりねろを	依念 小川純子 4 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	書学 松岡聖子 4 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき	益 中野安住 2 とよけなうふれみなりもろふれ もいひひーほのつるさういねわ ほさき

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

書学六段 本山隆子

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

小絹 七 小畑文孝

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

新書 津金友 川崎直美

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

東西六段 北村美智子

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

山北 七 横庭 華 命

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

新書 津金友 宮城京洲

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

玉葉 津金友 山本月華

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

芳野 準八 山辺 航平

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

野知 津金友 玉川 素子

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

びわ 津金友 内田 閑雲

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

大東 八 高 林 翠花

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

天草 部内 則文 黒川 良子

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

日暮 里八段 大倉 美奈子

おくれは母の
あそび追ふを
おさげの髪に
春の風ふく

本学 八 石井孝夫

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
吉田和子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
萩田有香子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
小形大美子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
神目二段 重目圭央

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
大柳 初花 田規典

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
石原富子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
小諸 四 藤原智子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
望水 三段 守屋美佐子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
秋月 二段 堀口静江

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
格星 初花 神田富子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
三原 三子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
白雪 四 長谷川恵子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
青学 三 上川純子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
加茂 二 宮崎ヤイ

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
三花 初 藤原美江

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
墨夷 三子 對馬英一

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
幸立 四 栗栖智子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
神端 準三 萩原奈々

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
青学 三 清水有紀

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
格星 初 岡本恵泉

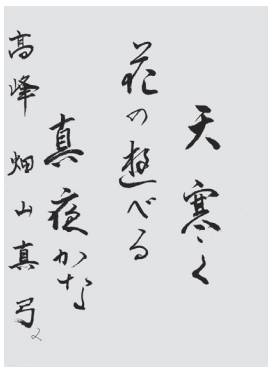
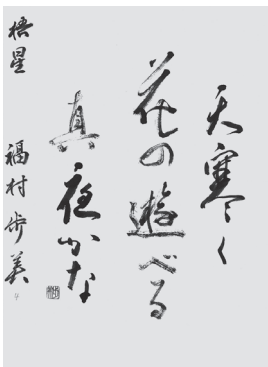
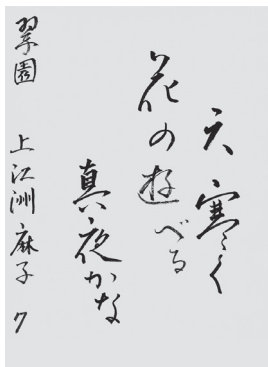
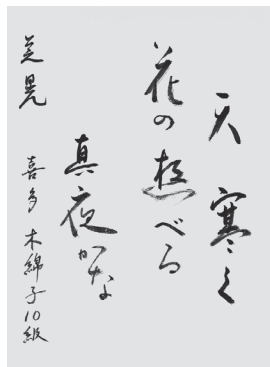
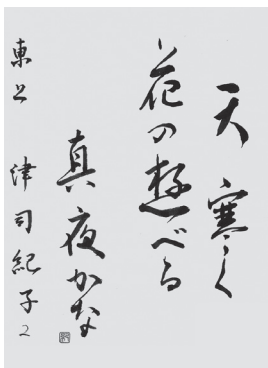
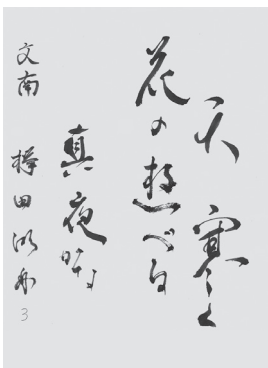
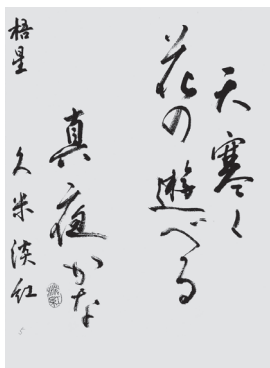
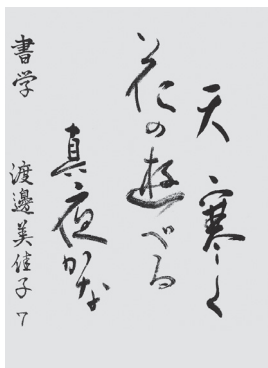
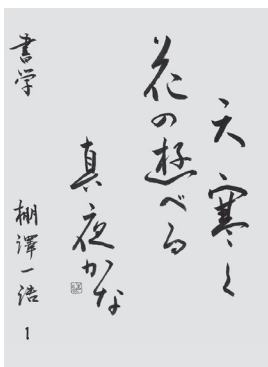
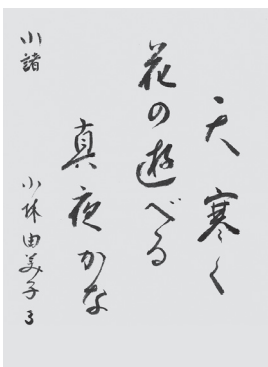
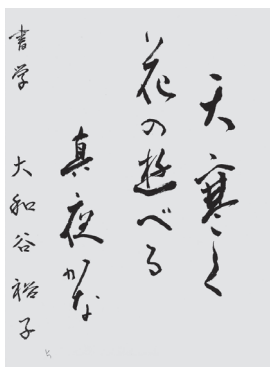
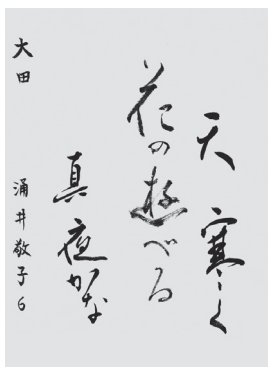
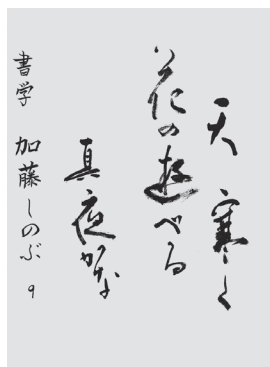
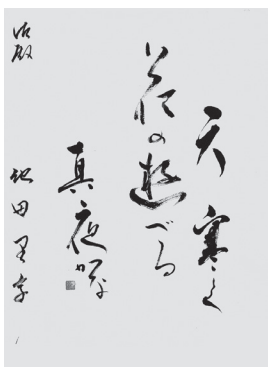
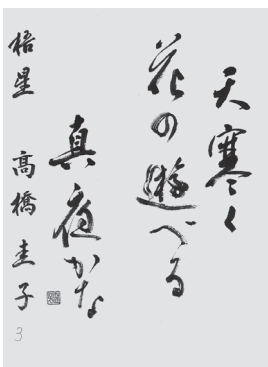
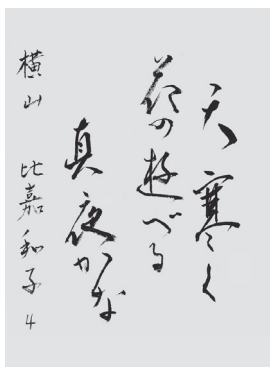
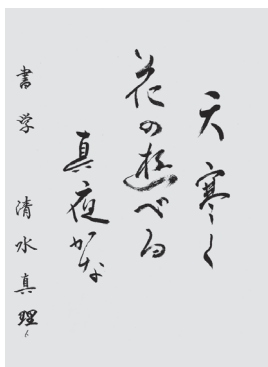
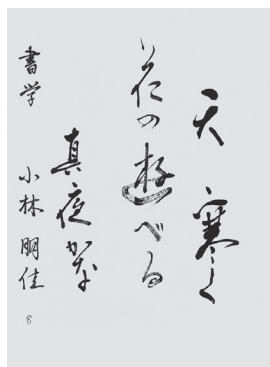
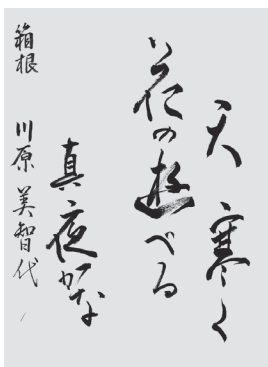
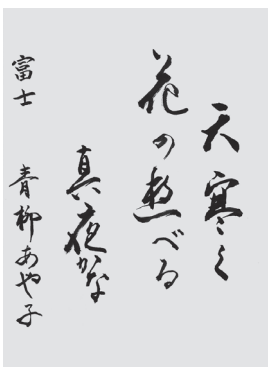
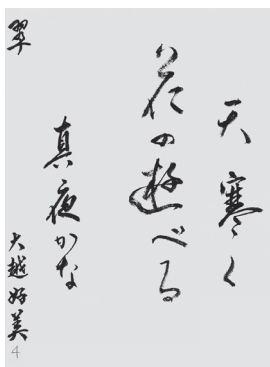
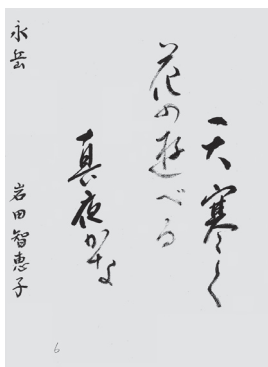
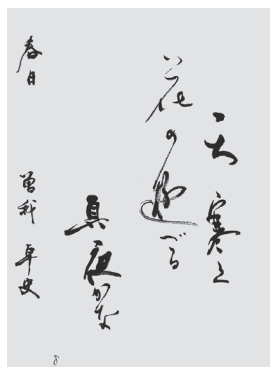
浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
八代 三子 上村美子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
奏 洋四 安藤紗更

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
北沢 三子 穂坂敏子

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
後心 初 杉本道樹

浅緑 敷き足は
遠き草の中
わがふる里
の響き
青学 三子 山本恵市



自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

親門 菅原 愛山

紅衫 磯崎あゆみ

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

蘭燈 草間 倫子

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

書学 金丸 真理

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

横浜 荒井友貴子

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

埼玉 青木 美幸

竹堂浸夜開

書学 赤田 千恵

竹堂浸夜開

乙巳季春 子恵

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

山本 青柳 光祥

書学 渡辺 昌弥

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

水荃 早坂 恵子

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

書学 宗像 陽子

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

和同 青木 千恵

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

結 吉田 香花

竹堂浸夜開

梧星 湯田 溪花

竹堂浸夜開

乙巳季春 溪花

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

広島 好田 萩水

書学 久保真紀子

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

欣書 重城 佳春

自稱臣是酒中仙張
旭三盃草聖傳

あおば 伊勢谷咲帆

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

MM 千葉 伶華

為亡息牛欄請工鏤
石造此弥勒像

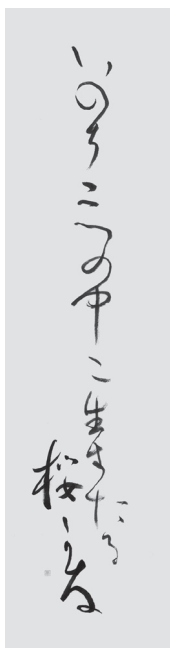
梧星 柿本 久琴

竹堂浸夜開

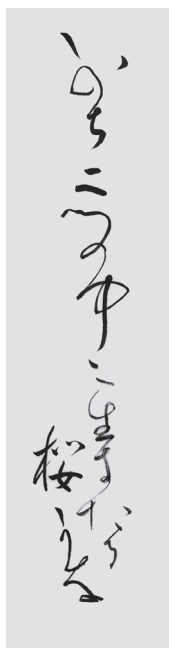
梧星 福村 歩美

竹堂浸夜開

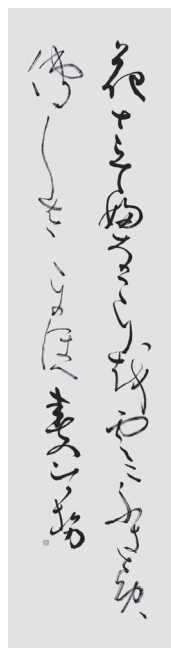
乙巳季春 外美



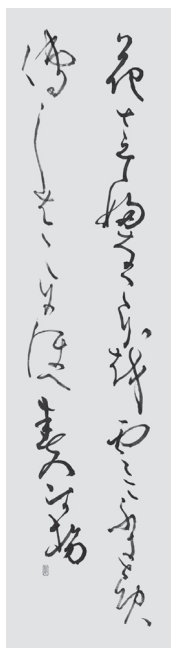
書学 山本 恵市



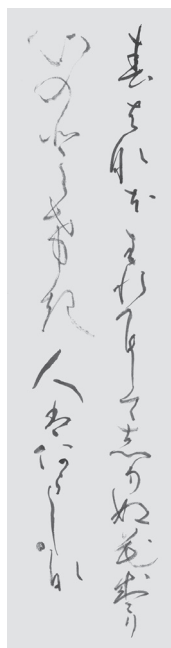
黒水 茂野 芳子



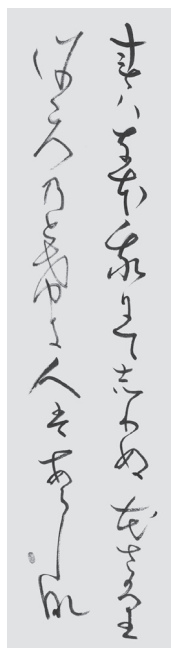
櫻 永田 弥生



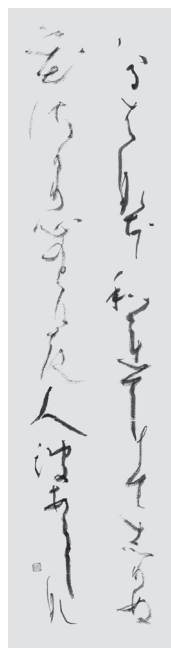
九書 石橋 栄子



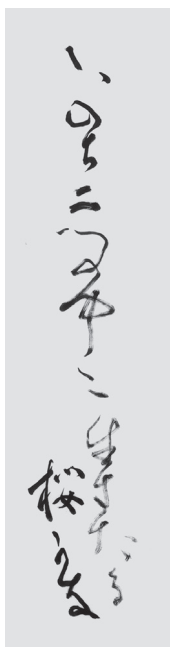
水荃 山下 啓子



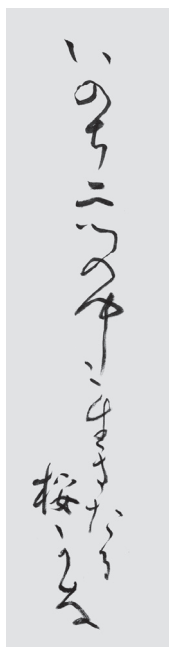
書学 田村紫王子



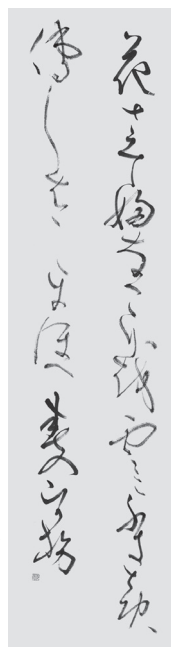
書学 原地 桃香



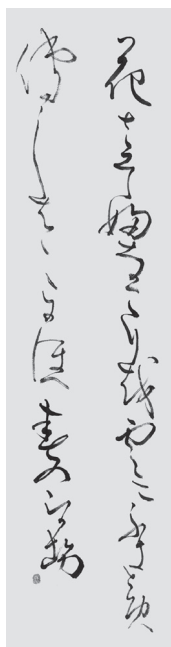
書学 谷口 清人



千間 北川 貴子



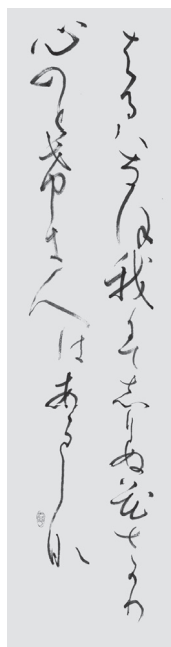
MM 千葉 伶華



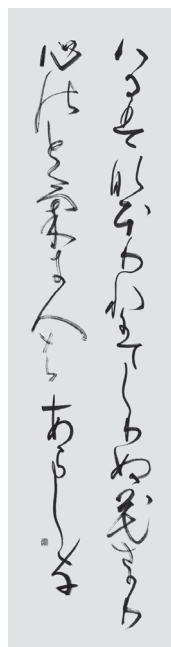
大井 高木 洋子



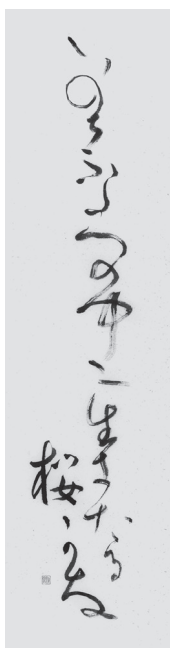
志水 大倉 秀子



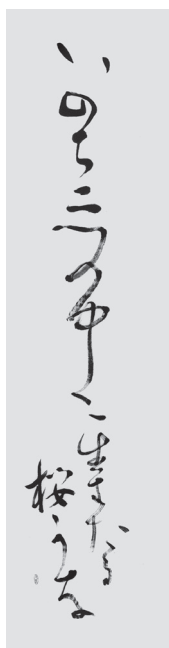
月倫 清水 君子



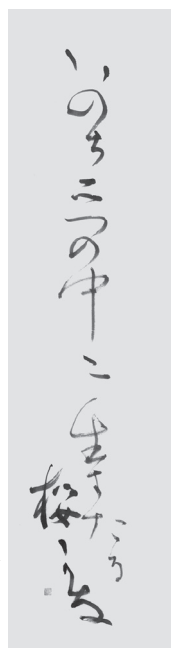
欣書 重城 佳春



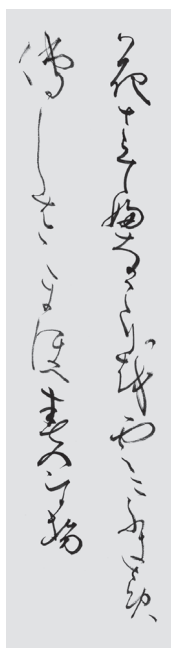
長秋 市川 佳泉



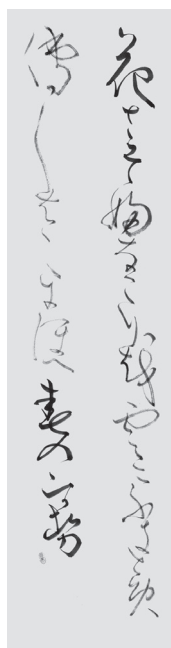
書学 藤林 千春



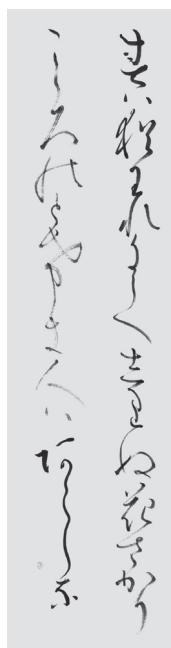
荃崎 長嶋 麗水



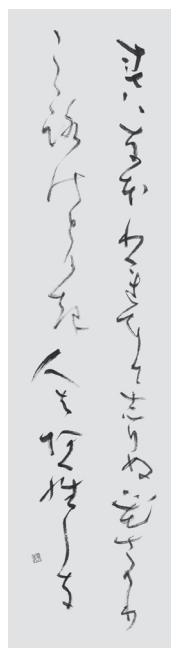
兵庫 谷垣 昌代



水荃 源 貴美



野沢 高柳美佐恵



永岳 野島 静江

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

宮城 阿部 絹子

書学 川瀬 英之

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

九書 石橋 栄子

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

水荃 辰巳 望雲

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

山口 神田真理子

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

二戸 戸田 克子

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

洗心 村松 永好

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

書学 藤森 泰明

書学 豊福絵里子

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

日南 藪下 春子

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

CY 岡田 圭峯

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

小諸 篠原 智巨

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

水荃 末脇 美香

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

杏花 鈴木 亨

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

大分 安部 征遠

水監 宮迫 央苑

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

書学 酒井 葉香

のぼり来し比叡の山の雲にぬれて
馬酔木の花は咲きまかりけり

書学 福田 昌翠

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

書学 石井 美帆

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

書学 槻木 新一

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

書学 和泉 詩

蝶ひら／＼ゆへへのどけきながあかな
菜の花一里 春の風ふく

教室名	佐倉
氏 名	石渡 櫻佳
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	洗心
氏 名	森田 知波
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	伊賀
氏 名	山口 智代
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	墨美
氏 名	高橋 秋帆
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	書学
氏 名	加藤 恵美子
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	福岡
氏 名	林田 亜美
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	山本
氏 名	青柳 光輝
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	ぬま
氏 名	斎藤 和菁
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	高崎
氏 名	新保 昭子
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	都筑
氏 名	村崎 香織
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	西宮
氏 名	中島 美幸
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

教室名	瀬谷
氏 名	浅井 柊泉
形ばかりの品でございませうがお土産の——に 当地の名産品でとてもおいしいとききましたので ご主人様のご好物と伺っておりますたので	

神變若得見者心必清淨或聽我等往至
佛所於是二子念其父故踊在虛空高七
多羅樹現種種神變於虛空中行住坐卧
身上出水身下出火身下出水身上出火
或現大身滿虛空中而復現小小現大於
空中滅忽然在地入地如水履水如地現
如是等種種神變令其父王心淨信解時
父見子神力如是心大歡喜得未曾有合
掌向子言汝等師為是誰誰之弟子二子

西宮 中島 美幸

神變若得見者心必清淨或聽我等往至
佛所於是二子念其父故踊在虛空高七
多羅樹現種種神變於虛空中行住坐卧
身上出水身下出火身下出水身上出火
或現大身滿虛空中而復現小小復大於
空中滅忽然在地入地如水履水如地現
如是等種種神變令其父王心淨信解時
父見子神力如是心大歡喜得未曾有合
掌向子言汝等師為是誰誰之弟子二子

金子 金子シゲ子

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

書学 北江 恵子

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

書学 和久津久美

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

中台 戸田 優子

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

書学 小島 黄雪

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

書学 尾崎美和子

神變若得見者心必清淨或聽我等往至
佛所於是二子念其父故踊在虛空高七
多羅樹現種種神變於虛空中行住坐卧
身上出水身下出火身下出水身上出火
或現大身滿虛空中而復現小小復大於
空中滅忽然在地入地如水履水如地現
如是等種種神變令其父王心淨信解時
父見子神力如是心大歡喜得未曾有合
掌向子言汝等師為是誰誰之弟子二子

書学 國吉 利典

摩訶般若波羅蜜多心經
觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
異色色即是空空即是色受想行識亦復如
是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
不增不減是故空中无色无受想行識无眼
耳鼻舌身意无色聲香味觸法无眼界乃至
无意識界无无明亦无无明盡乃至无老死
亦无老死盡无苦集滅道无智亦无得以无

書学 伊澤 佳那

審査評―秋山 凌雲

規定 「栄光五色」



書学 藤野 仁三

刀がよく切れていて線質も強い。漢印の特徴を良く捉えた秀作。



書学 石井 孝夫

外郭を太く中の文字を細くして全体的に変化に富んだ雅味ある作。



水荃 武藤美栄子

垂線の界線を効果的に入れたため、作品全体が引き締まっている。模範的な小篆の作品。

随意 「行雲流水」



水荃 青戸 佑きこ

印稿段階で構想を十分に練っているせいか分間布白が素晴らしい。外郭下辺はもう少し撃辺を加えてもよかったか。

規定 (瞬)

審査評―石橋 鯉城

書美の真髄を求める漢字の一字書――



櫻水 滝沢 石楠 この字は18劃。それを簡明に草書で表現。これだけの表現力を伴えば完璧と言はん。傑作。偏は黒い塊に、旁は點劃が躍りたり。

洗心 久保 治舟 無理のない自然なる運筆。骨力もありて草書に活を入れる。終始一貫氣脈貫通。今迄に見ざる貴女の最高傑作。學び甲斐を見ん。

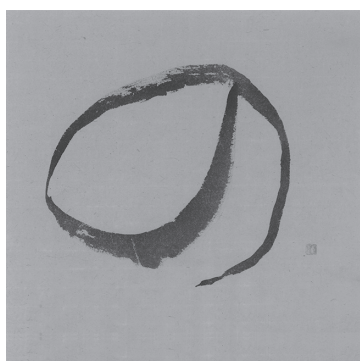
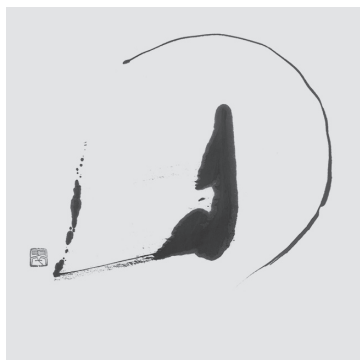
三木 宮田 雲鶴 少し力みがとれての樂趣を見る。正面に書かれた瞬は左に傾くが畫印の位置、大ききでバランスを保つ。墨色にて印象もまた變化か。

平心 長田 哲香 瞬を金文の型を以て書す。濃墨にて點劃も鮮なり。分間物を言ふ。作品として右側押印は蛇足ならんや。餘白として残したい。

随意 (の)

審査評―石橋 鯉城

詩情や筆遣ひの極意を知る平がな表現――



松 角田 茅水 達腕にして指法も加えて、線質墨色共に佳なり。作品の規模も大きい。雅印も變形印を用ひて作風寛綽。

水荃 浦上みどり 梨を二つ截りにせし折りの表面を見るが如し。金冬心の餌菊詩に、其れが書か圖案かの問いを投げかけるやふな面白さを表現。簡明、清楚。

神奈 齊藤 仲子 平假名「の」を表現して其の原字「乃」を想はせる。筆の走りもよく、藏鋒、露鋒の變化もありて含蓄に富む。永年の習練の賜。

一色 飯塚 幸子 形意共に平假名の行意をもつて筆を運ぶ。優美にして自然な運腕を見る。筆の鋒の開閉にて書線の輪郭の粗滑を見せる。鋒先閉じて静寂。